

戦火に散ったアマチュア選手 ②

タイガース 森 国五郎

森国五郎（もり・くにごろう）という選手が戦前の大阪タイガースにいた。古豪・大分商業を経て、1939（昭和14）年に入団。3シーズンをわたって甲子園の外野を駆け回っている。要所要所ではスタン・ドを沸かすプレーもあったようだが、戦後に生まれていたら、個人的な名前からも、ファンに愛される選手になっていたことだろう。

（フリーライター・吉岡雅史）

森は身長164センチで、他の選手と比べても頭ひとつ小さい。左投げ左打ちで、好守好打の外野手として重宝されたという。球団名が「阪神軍」に改められ



好守好打の小兵(あつと)驚くクニゴロウ

トノーランを演じ、大分商業は4-0で台北一中に快勝。

スフとは「ステイブル・ファイバー」の略称で、人造綿花のこと。近衛内閣が38年に国家統制から綿製品を禁止したため、野球の硬球はたちまち材料不足に陥った。結局41年のシーズンには、3割を打ったのが首位打者の巨人・川上哲治（3割1分）ひとり、2位が2割6分7厘。統一球の影響で極端な投高打低となった今シーズンより、さらに低水準である仮に森があと5本多くヒットを打っていたら、全体の6位にまで跳ね上がっていた計算となる。

センターからホームへ ストライクの返球

このシーズン終了後、森に召集令状が届き、プロ野球生活はあつてなく幕を降ろす。

世に何千何万と出版された阪神関連の著書に、森に関する記述は見当たらない。しかし、森の郷里・大分には、手がかりがあった。老齢男性が数人、居眠りと読書を繰り返すのどかな大分県立図書館で、目当ての自費出版の2冊は、これまた目立ちにくい場所に保管されていた。

森の4年後輩にあたる野田国

に見ることができた。

▲左翼手として有名を馳せ、大分に錦を飾った。時の巨人軍の大投手であるスタルヒンの超速球を郷土の人々の前で見事流し打ちで左前安打を放ち（球場は城崎球場）、益々その天才ぶりを発揮した。改めて故森国五郎氏の選手時代を思い浮かべてみると、どうしてあんな名選手が戦死したのかと悲しくなる。とにかく上手であった。もうあんな名選手は出ないだろう。私の野球人生で出会った中で最高の名選手であった▼

レフトということは入団2年目、1919年9月生まれの森が21

大分商業時代の森（左）。右はエース浦野で、身長差は歴然

1番センターの森は2本ヒットを打っていた。2回戦は、この大会で優勝する平安中学に0-4で敗れたが、森はここでもヒットを1本放った。

この敗戦には裏話がある。試合前夜、選手たちは校長が差し入れた牛肉をスキヤキにして食べた。ところが、慣れないご馳走を食べたせい、大半の選手が下痢をしてしまったのだ。

このときのエース浦野の、長男・隆太郎氏が上梓した『浦野隆夫の野球人生』でも、父親の回顧は森に言及している。

▲当時は職業野球に行くことを学校は非常に嫌っていて、スカ

ウトを絶対学校に入れませんでした。森国五郎君は、契約金はなく僅かの旅費程度の支度金、月給は90円。派手な職業野球選手は金を浪費するので、森君の母に毎月50円送ることが入団の条件でした▼大卒銀行員の初任給が70円の時代だから、待遇はよかったです。また、その半分以上を実家への仕送りとした点に、球団側が両親を説得した際の苦心がくみ取れる。

スタルヒンの超速球を流し打ちで左前安打

期待されて足を踏み入れたプロでの活躍は、前述の野田の著書

